ドラム缶工業会会報

ひびき

CONTENTS

1 理事長就任にあたって――小野定男氏
3 新社長登場・ダイカン(株)／林亮司氏
4 ミニ講演会――西出徹雄氏
5 ペール委員会見学会レポート
6 鋼製ドラムは〝リサイクルの優等生〟
7 化学工業指数の推移
7 200Lドラム缶市場動向推移
8 平成25年度出荷実績

69

第23代理事長 就任挨拶

理事長就任にあたって

JFEコンテイナー株式会社
代表取締役社長　小野 定男

ドラム缶工業会の新理事長　就任にあたっての抱負

小原前理事長の後任として、第23代理事長に就任しました。また、ドラム缶工業会理事長として、国際組織であるアジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会（AOSD）と国際鋼製ドラム製造業者連合会（ICDM）の会長職も引き継ぎました。

ドラム缶工業会は1952年の設立以来60年を超える長い歴史のなかで、化学や石油、塗料や各種の薬品をはじめとする我が国産業の国際競争力の強化に貢献することを目的として、安全で使いやすく、環境に優しい優れた容器としてのドラム缶、ペール缶の進化と革新をサポートする活動を行ってきました。

我が国のドラム缶、ペール缶の競争力は、高い技術力と品質、デリバリーの確かさにあると思います。ドラム缶、ペール缶の製造に係る技術先進性の維持と強化、総合的な技術力の向上を図るため、国内外の情報収集と会員各社への発信を一層強化してまいります。

また、国際規格ならびに危険物輸送用容器の規則問題や標準化については、産業用容器として国際的な物流が拡大するなかで、ドラム缶業界はもちろんのこと、我が国産業の国際競争力を高める狙いから積極的に取り組んでまいります。

ゼロ災害の達成は会員各社共通の最優先課題です。工業会では2006年から会員各社の災害事例の共有化による類似災害の撲滅活動を継続しています。今後とも、目標である「完全無災害の達成」まで、会員各社と知恵を絞り、積極的に取り組んでまいります。

近年、新たに会員各社共通の悩みとして、製造設備の老朽化や社員の世代交代に伴う技能伝承問題が顕在化しています。これらは会員各社が個別に解決すべき課題でありますが、工業会として何らかのサポートができることがあれば取り組んでまいりたいと思います。

会員各社がますます高度化する我が国産業界の様々なニーズに対応し、一層の国際競争力強化に貢献できるよう、工業会として様々な活動に取り組んでまいります。

ドラム缶の需要動向

200L新缶の出荷状況は、2007年度に1,580万本のピークを付けた後、2008年度はリーマンショックにより一転、1,300万本を割り込みました。その後は2010年度に1,450万本に回復したものの、東日本大震災、円高、中国など新興国の成長の

スローダウンなどがあり、下落傾向が続きました。しかしながら安倍内閣のいわゆるアベノミクス効果により、2013年9月からは前年を上回る状況が続いています。2013年度の出荷本数は、1,345万本と前年比2.4%増となり、3年ぶりに前年実績を上回る本数となりました。2014年度も6月まで同様の傾向が続いており、「大胆な金融政策」「機動的な財政政策」に続く第3の矢「成長戦略」の確実な実行により効果が続くことを期待しています。

2014年度の課題

前年に引き続き需要業界の動向についてはよく注目していきたいと思います。化学業界はドラム缶需要の8割を占めますが、能力削減や再編、海外移転の流れは継続しています。また機能化学品を拡大・強化する動きも強まっており、一段と高度化・多様化する需要家ニーズへの対応を考えていかねばなりません。また石油業界も政府の施策により精製能力削減が検討されており、我々としてもその動向を注視してまいりたいと思います。

また、原子力発電所の稼働停止や円安による原燃料価格上昇に伴う電力価格の構造的な上昇、国内景気回復に伴う人件費や物流費の上昇等、素材価格のみならず、製造・輸送に関わるあらゆるコストの上昇がドラム缶業界の経営に大きな影響を与えており、新たな構造問題ともいえる状況に直面しています。

国際連携

AOSDの第8回国際大会が、2013年11月にタイ国パタヤ市で開催され、17の国・地域から約200名が参加し、数多くの技術論文が発表され熱心な討議が行われました。JSDAが主催した本大会が成功裏に終了したことについて、小原前理事長はじめ前執行部の方々の多大なる努力に敬意を表します。次回は2016年にインドで開催予定ですが、今年はその準備もあり、技術委員会メンバーをインドに派遣し、工場見学等インドでの業界事情の視察や次回会議開催に向けた協議を計画しています。また、AOSDの役員会、およびICDMの役員会も各々9月に開催予定であり、両役員会の会長として国際規格ならびに規則問題や環境・安全問題など諸課題について議論する予定です。

その他

ドラム缶工業会は、ドラム缶のさらなる発展のため会員各社が力を合わせて活動している団体ですが、コンプライアンスは特に留意しております。6月に専門家を招いてコンプライアンス研修会を行いましたが、常にコンプライアンスの徹底に万全を期してまいります。

今後も日本の需要家の皆様のさらなる競争力の強化に貢献する所存であり、会員各社におかれましては、引き続き工業会活動にご理解をいただきご協力をお願いいたします。

よろしくお願いいたします！

役員紹介

平成26年7月1日現在

■ 理事長		小野　定男	JFEコンテイナー(株)	代表取締役社長
■ 副理事長	● 200L缶関係	小原　知実	日鉄住金ドラム(株)	代表取締役社長
	● 中小型缶関係	山本　和男	(株)山本工作所	代表取締役社長
	● ペール缶関係	野上　正道	(株)ジャパンペール	代表取締役社長
■ 常任理事		斎藤　邦一	斎藤ドラム罐工業(株)	代表取締役社長
		関根利三郎	新邦工業(株)	代表取締役社長
		林　亮司	ダイカン(株)	代表取締役社長
		今井　久代	(株)東京ドラム罐製作所	代表取締役社長
	■ 兼監事	下川　洋治	東邦シートフレーム(株)	代表取締役社長
	■ 兼監事	長尾　浩志	(株)長尾製缶所	代表取締役社長
		前田　洋	(株)前田製作所	代表取締役社長
■ 委員長	● 企画・統計委員長	久保　正幸	JFEコンテイナー(株)	取締役
	● 技術委員長	縄田　康隆	日鉄住金ドラム(株)	取締役・専務執行役員
	● ペール委員長	松田　賢治	(株)ジャパンペール	技術企画室室長

(注)任期は平成29年度総会まで。

新社長登場

ダイカン株式会社

代表取締役社長　**林 亮司**

「ドラム缶の国内市場は成熟している。今日受けたオーダーが、明日も入ってくるとは、思ってはいけない。安定的に受注を確保していくためには、品質向上と生産性アップへの取り組みは欠かせない」と抱負を語るのは、林亮司社長。6月30日付で、河島秀行前社長からバトンを受け継いだ。先輩諸氏が築いてきた「家族的な雰囲気を持ついい会社だと思う。さらに風通しを良くし、各社員の創意を凝らして業容拡大していきたい」と、総合容器メーカーとして強い経営基盤の構築を目指す。

ダイカンは、1919年（大正8年）に鋼製ドラムメーカーとして、大阪市北区長柄に創業した。容量15リットルから200リットル未満の中小型缶と200リットル缶の生産を手掛けたほか、1958年からは紙製のファイバードラムの製造販売を開始。「現在の大阪市此花区に大阪工場を移転したのが1983年で、中小型缶で国内トップシェアを獲得した。さらに1997年には大阪工場第2ラインとして200リットル缶専用ラインを設置し、量産を開始した」と紹介する。その間、損害保険ジャパン（旧安田火災海上保険）の子会社から「鋼材の需要先開拓を目的に、神戸製鋼所と住友商事が資本参画した」と沿革を辿る。資本金は4億9,000万円で、この主要3社のほか需要家など合計13社が出資する。現在では鋼製ドラムを製造する大阪本社工場のほか、ファイバードラムを製造する3拠点（枚方工場、東海工場、九州ダイカン）、物流子会社などと合わせて、総合容器メーカーとしてグループ体制を構築している。従業員数はグループ全体で200名規模だという。

品質向上と生産性を一段とアップ

鋼製ドラム部門では、中小型缶や200リットル缶について、クローズドタイプやオープンタイプ、ステンレスタイプと多彩なドラム製品を品揃えする。「現在、生産能力は鋼製ドラム合計で月産16万缶で、納入先は西は山口・九州まで、東は中部・北陸から関東エリアへと広範囲にカバーする」と事業展開する。こうした中で、厳しい事業環境に勝ち抜くためには「品質と生産性への取り組みに尽きる。これまで国内外で多くの取引先の新鋭工場を訪れたが、それらの拠点と比べても改善の余地はありそうだ。“現場は宝の山”としてコンタミ防止をはじめ、傷や凹みといった外観性、印刷品質、納期厳守といったクレームをどこまで低減させられるかがテーマだ。問題意識を持って、今後も改善努力を続けていく」と具体例を示す。

体質強化への取り組みを積極化

7月1日付で経営理念“容器事業を通じて社会の発展に貢献する”を見直すとともに、経営方針や企業の社会的責任（CSR）への取り組み、行動規範をあわせて整備した。社員に向けては、体質強化によって「安定的な収益率アップへの取り組みを強める。安定受注を狙って、必要な投資を行っていく一方で、社員一人ひとりが智恵を出し合い創意工夫して自分の職場を改善、さらに職場を飛び越えた改革に取り組んでほしい」と呼びかけた。そして、経営課題として、200リットル缶品質高度化やファイバードラムの新規用途開拓への取り組みなどを開始。矢継ぎ早に施策を打ち出した。

この数年で平均年齢は低下。現場を中心に若返りが進んでいるという。「世代交代を見据えて、人材育成も積極化していく」と意欲的だ。

林亮司社長は、1955年生まれの59歳。1980年に早稲田大学政経学部を卒業後、神戸製鋼所に入社。営業畑を歩んできた。「中でも、鋼板輸出部門が長く、その間デトロイト駐在員事務所所長やKOBE STEEL USA社長を務めるなど、米国滞在期間は約10年となった」と振り返る。2010年に中国支店長として広島へ赴任し、2年後の2012年には名古屋支社長に就任した。この4月から「広島と名古屋の中間にあるダイカンへと移籍した」と自己紹介する。趣味は「学生時代に油絵をやっていたことから絵画鑑賞と読書。スポーツも好きで、米国滞在時にゴルフをする機会が多かったけれども、上達しなかった」と苦笑する。六甲山近くに自宅を構えたこともあって「週末には家族と山歩き（ハイキング）を始めようと思う」と健康増進にも気を配る。

ミニ講演会　平成26年4月21日　鉄鋼会館にて

「シェールガス革命と今後の化学産業」

講師：西出 徹雄 氏

ドラム缶工業会では、平成26年度の企画として一般社団法人 日本化学工業協会、西出徹雄専務理事を講師としてお呼びし、会員を対象に講演会を開催しました。

従来は採取が困難であった頁岩層に含まれるシェールガスやシェールオイルが技術進歩により経済的に商業生産されるようになり、今後の開発と見通し、影響についてお話しされました。

また、新エネルギーを取り巻く環境のなかでの、化学産業の課題と将来についても詳しく説明して頂きました。

その後、受講されていた会員からも率直な質問が出されました。

講演される西出 徹雄 氏

講演を聴きに集まった会員

質問に答える西出 徹雄 氏

講師プロフィール

西出 徹雄

1975.3　東京工業大学大学院理工学研究科
　　修士課程 修了
1975.4　通商産業省　入省
1997.7　通商産業省　化学課長
2001.1　環境省　大気環境課長
2002.7　経済産業省　中国経済産業局長
2004.6　塩ビ工業・環境協会　専務理事
2007.7　社団法人 日本化学工業協会　専務理事
2007.4～2012.3
　　立教大学大学院ビジネスデザイン研究所
　　特任教授

ペール委員会 見学会レポート

富士重工業株式会社
群馬製作所
AGF関東株式会社

ドラム缶工業会のペール委員会は4社7工場で構成されています。

構成会員会社はあらゆる分野のお客様に、最高品質のスチールペール缶を提供するため、製品品質、製造技術の向上に平素、努力しています。

この度、ペール委員会での技術テーマ「オートメーション技術の調査」の一環として、独自の技術文化のある「富士重工業株式会社 群馬製作所」および高度な食品の品質衛生管理を行っている「AGF関東株式会社」の工場見学を実施いたしました。

1. 見学日

平成26年4月4日（金）　8時40分～14時30分

2. 見学場所

富士重工業株式会社 群馬製作所（群馬県太田市庄屋町1-1）
自動車組み立てライン、プレス、溶接工程

AGF関東株式会社（群馬県太田市世良田町1588-16）
インスタントコーヒーの製造ライン

3. 見学者

ペール缶4社、合計で16名

4. 富士重工業株式会社　群馬製作所見学

レガシー、インプレッサー、フォレスター、エクシーガを生産しています。昭和33年に発売された「スバル360」以来、中島飛行機から受け継がれた航空機設計の基本思想が基となり、「モノづくり」が行われています。

工場見学は展示ホール、プレス工程、ボディ溶接組み立て工程、塗装工程、トリム工程、完成検査の順序で行いました。スバルが初めて販売した「スバル360」から現在発売中のBRZまでの車が展示されていました。各年代に製造した代表的な車について、当時の新しいスバルの技術についての説明がありました。「スバル360」の開発に使われた石膏原寸大モデルの展示があり感銘を受けました。

組み立てラインの見学では、作業者の動きが比較的ゆっくりと見えたことから、各工程での合理化や創意工夫が相当進んでいると思われます。また、工場敷地内に展示されていた引退した自衛隊訓練用飛行機や他の自動車メーカーにない水平対向エンジンにはスバルの独自の技術文化を強く感じました。

5. AGF関東株式会社

コーヒー豆を焙煎、配合、粉砕、抽出して、インスタントコーヒーのブレンディやマキシムを製造しています。またペットボトル入りのブレンディも製造しています。

製品の安心・安全をモットーにきめ細かい品質管理や衛生管理の取り組みを全社で展開しています。

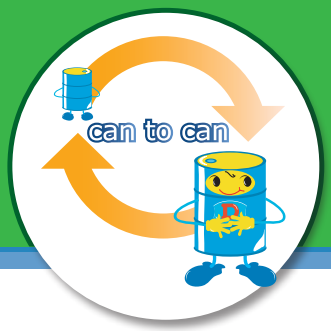
工場の上履きは白クツ、下履きは黒クツ、製造ラインの入室は粘着ロールで作業着のコンタミを取る、また充填ラインの従業員は直近2週間以内で病院に行っていない健康者であること等のきめ細かい衛生管理について説明がありました。

厳しい食品産業の衛生管理や品質管理について、参考にできるものは取り入れていきたいと思います。365日4直3交代の工場であり、休みなしで朝から深夜まで1日中継続して品質管理のレベルを一定に保持するには大きな努力が必要だと思われました。

スバル360石膏原寸大モデル

富士重工業見学記念

AGF関東見学記念



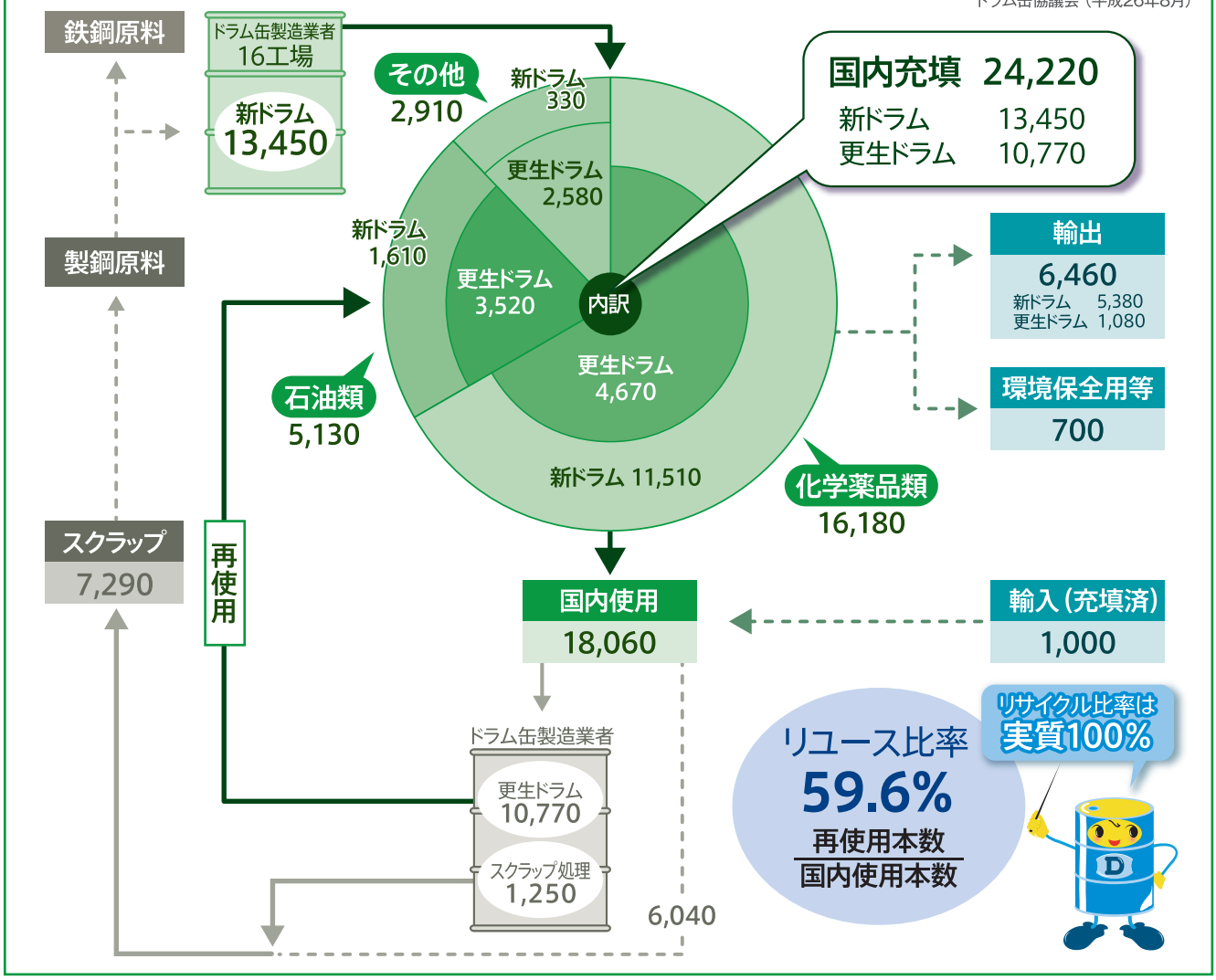
鋼製ドラムは“リサイクルの優等生”

資源としてのリサイクル比率は実質100%

鋼製ドラムは使用後、一部は更生缶メーカーに回収され、一部はユーザーから直接スクラップ処理業者に回収されています。ドラム缶はこのようにリユース（再使用）およびリサイクル（再利用）が確立しており、循環型リサイクルの優等生といえます。下の図は平成25年度版200L鋼製ドラム リユース＆リサイクルフローチャートです。ドラム缶のリユース比率は59.6%になりますが、環境保全用ドラム缶を除くと、資源としてのリサイクル比率は実質100%になります。

200L鋼製ドラム リユース&リサイクルフローチャート（平成25年度ベース 単位：千本）

ドラム缶協議会（平成26年8月）

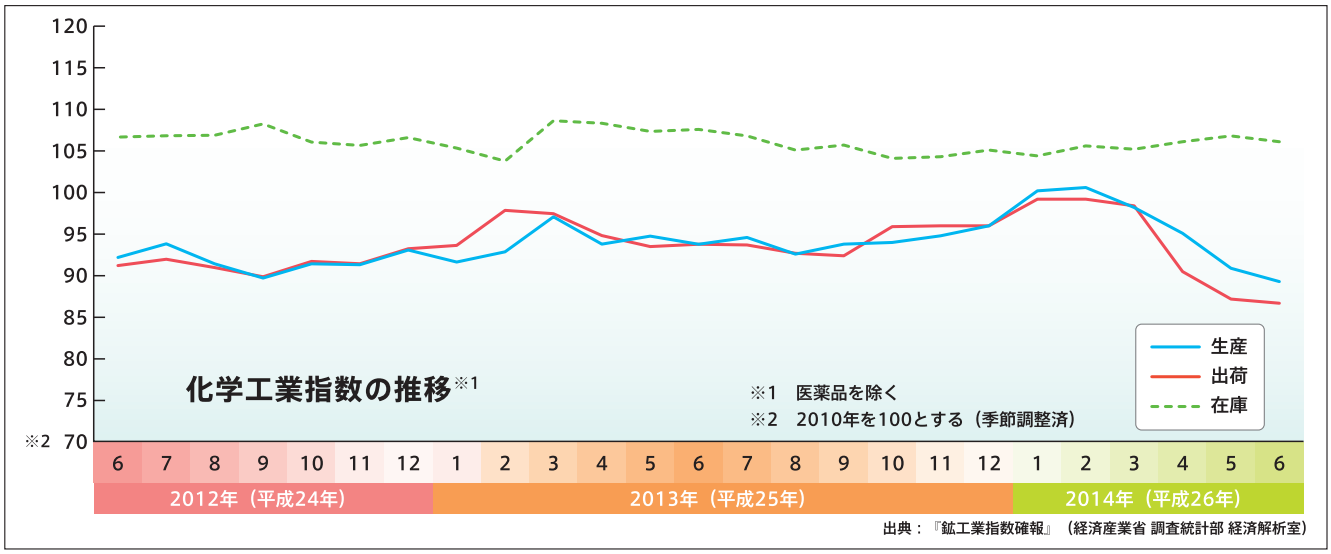


		当初（平成9年）	20年度ベース	21年度ベース	22年度ベース	23年度ベース	24年度ベース	25年度ベース
工場数	新ドラム	18工場	16工場 (▲1)	16工場 (変わらず)	16工場 (変わらず)	16工場 (変わらず)	16工場 (変わらず)	16工場 (変わらず)
製造本数	新ドラム	12,000千本	12,950千本 (▲18.0%)	13,270千本 (+2.5%)	14,520千本 (+9.4%)	13,540千本 (▲6.7%)	13,130千本 (▲3.1%)	13,450千本 (+2.4%)
	更生ドラム	16,000千本	11,350千本 (▲15.1%)	10,820千本 (▲4.7%)	11,180千本 (+3.3%)	10,320千本 (▲7.7%)	10,070千本 (▲2.5%)	10,770千本 (+7.0%)
国内充填		28,000千本	24,300千本 (▲16.7%)	24,090千本 (▲0.9%)	25,700千本 (+6.7%)	23,860千本 (▲7.2%)	23,200千本 (▲2.8%)	24,220千本 (+4.4%)
国内使用		26,000千本	19,580千本 (▲16.3%)	18,000千本 (▲8.1%)	19,070千本 (+5.9%)	17,710千本 (▲7.1%)	17,240千本 (▲2.7%)	18,060千本 (+4.8%)
リユース比率		61.5%	58.0% (+0.8%)	60.1% (+2.1%)	58.6% (▲1.5%)	58.3% (▲0.3%)	58.4% (+0.1%)	59.6% (+1.2%)

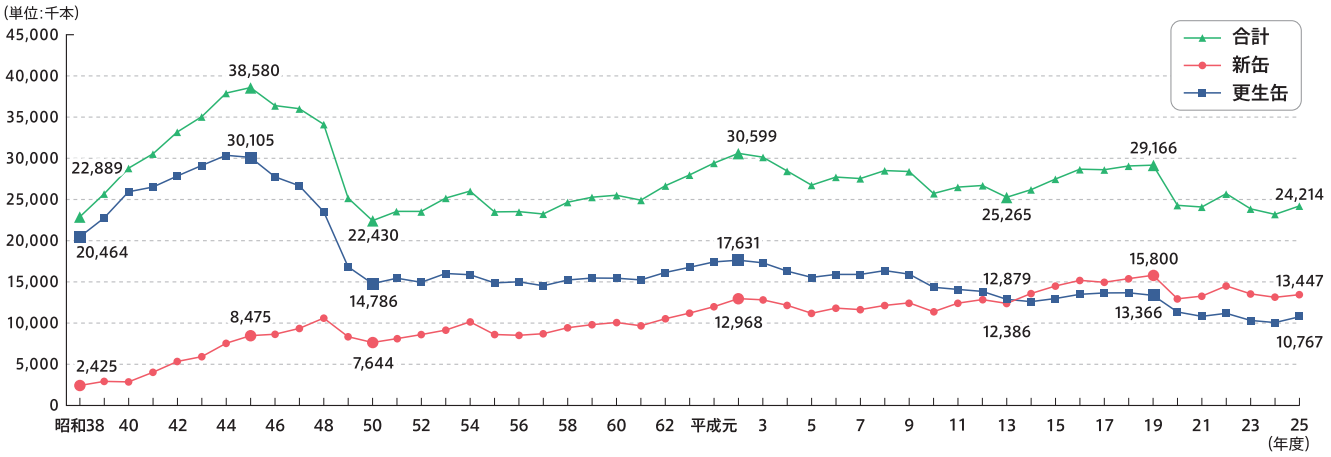
Watcher Report

化学工業指数の推移

平成25年の化学工業（医薬品を除く）の生産動向を季節調整済指数でみると、生産、出荷はともに前年比から3年連続の低下、在庫は前年比より4年連続の上昇となりました。



200Lドラム缶市場動向推移（昭和38年度～平成25年度）



(単位:千本)

年度	昭和38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54
新缶	2,425	2,924	2,862	4,029	5,343	5,924	7,548	8,475	8,645	9,353	10,607	8,345	7,644	8,113	8,603	9,148	10,149
更生缶	20,464	22,763	25,936	26,510	27,852	29,125	30,363	30,105	27,749	26,666	23,520	16,830	14,786	15,444	14,949	16,018	15,867
合計	22,889	25,687	28,798	30,539	33,195	35,049	37,911	38,580	36,394	36,019	34,127	25,175	22,430	23,557	23,552	25,166	26,016

年度	55	56	57	58	59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5	6	7	8
新缶	8,613	8,518	8,710	9,436	9,810	10,070	9,674	10,523	11,212	11,993	12,968	12,822	12,156	11,189	11,814	11,636	12,142
更生缶	14,880	15,010	14,528	15,230	15,466	15,447	15,241	16,139	16,769	17,424	17,631	17,316	16,300	15,549	15,905	15,905	16,367
合計	23,493	23,528	23,238	24,666	25,276	25,517	24,915	26,662	27,981	29,417	30,599	30,138	28,456	26,738	27,719	27,541	28,509

年度	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
新缶	12,454	11,380	12,419	12,849	12,386	13,590	14,502	15,186	14,952	15,393	15,800	12,945	13,270	14,521	13,544	13,128	13,447
更生缶	15,941	14,344	14,084	13,847	12,879	12,602	12,981	13,491	13,658	13,675	13,366	11,346	10,817	11,184	10,320	10,062	10,767
合計	28,395	25,724	26,503	26,696	25,265	26,192	27,483	28,677	28,610	29,068	29,166	24,291	24,087	25,705	23,864	23,190	24,214

(注) 1. 千本以下四捨五入。　2. 昭和38年度の新缶生産本数は不明につき、生産トン数67,002トンを40年暦年平均単重27.63kgで逆算して算出した。

平成25年度出荷実績

平成25年度の200L缶の出荷は、前年度に比べ2.4%増、320千本増の13,447千本と増加しました。

用途別では、石油向け（前年度比7.8%増、117千本増）、化学向け（同2.0%増、209千本増）、塗料向け（同1.4%増、10千本増）は増加し、食料品向け（同3.6%減、7千本減）、その他向け（同4.9%増、8千本増）は減少しました。

ペール缶は前年度比3.6%増の19,655千本と増加し、中小型缶は同11.4%減の533千本と減少になりました。

平成25年度缶種別・用途別出荷実績

缶　種	平成25年度実績							
	本数（千本）	前年度比（%）	用途別〔（本数）（千本）〕					トン数
			石油	化学	塗料	食料品	その他	
200L缶	13,447	102.4	1,605 (87.7)	10,810 (98.2)	696 (100.8)	180 (97.1)	156 (95.0)	309,934
ペール缶	19,655	103.6	10,604 (97.9)	7,817 (95.2)	734 (114.0)		500 (88.5)	32,086
中小型缶	533	88.6	0	512	6		15	3,751
亜鉛鉄板缶	408	106.4		130	1	3	274	2,462
ステンレス缶	35	100.8		35				773
合計	34,078	—	12,209	19,304	1,437	183	945	349,006
※前年度比（%）	—	—	106.9	101.6	101.3	96.6	101.5	102.3
※構成比（%）	—	—	15.5	76.5	5.1	1.2	1.7	100.0

（注）1. 用途別200L、ペール缶の下段（　）は前年度比。　2. ※前年度比ならびに、※構成比は、トン数ベース。　3. 亜鉛鉄板、ステンレス缶は、200Lドラム及び中小型缶を含む。
4. 総本数は、34,078,246本。表上数値は四捨五入による差異がある。

（単位：千本）

缶　種	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
200L缶	15,186	14,952	15,392	15,800	12,945	13,270	14,521	13,544	13,128
ペール缶	22,630	22,642	22,384	22,513	19,973	19,672	20,379	19,545	18,968
中小型缶	1,119	967	922	927	784	673	783	696	602
亜鉛鉄板缶	413	451	470	461	446	382	383	381	384
ステンレス缶	46	39	40	39	34	34	34	37	34
合　計	39,394	39,051	39,208	39,740	34,182	34,031	36,100	34,203	33,115

会員

《正会員》
- 斎藤ドラム罐工業（株）
- JFEコンテイナー（株）
- （株）ジャパンペール
- 新邦工業（株）
- ダイカン（株）
- （株）東京ドラム罐製作所
- 東邦シートフレーム（株）
- （株）長尾製缶所
- 日鉄住金ドラム（株）
- （株）前田製作所
- （株）山本工作所

《準会員》
- 森島金属工業（株）

《賛助会員》
- エノモト工業（株）
- （株）大和鐵工所
- 三喜プレス工業（株）
- （株）城内製作所
- 東邦工板（株）
- （株）水上工作所

ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10
（鉄鋼会館6階）
TEL 03-3669-5141　FAX 03-3669-2969
e-mail：drum.pail@jsda.gr.jp

URL：http://www.jsda.gr.jp/

ひびきNo.69（平成26年9月1日発行）

発行人　ドラム缶工業会
常務理事　事務局長　本田 信裕

本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。